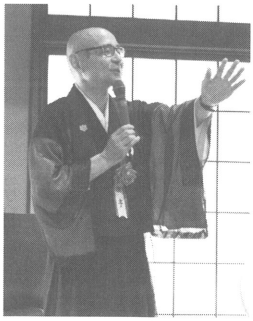
■第二部　座談会

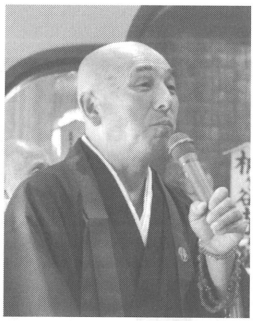
司　会　安藤嘉則（第六回生）
育英生　安井隆同（第二・三回生）
宇野恭章（第十一・十二回生）
真野大成（第十四・十五回生）
山本浄月（第五回生）
伊藤康心（第二十三回生）
胡建明（第五回生）
島崎義孝（第三・四回生）
岩波弘道（第三回生）
ヴィマラワンサ（第九回生）
引田弘道（第三回生）
ウィリアム・ダンカン（第十四回生）
サンヴィド・マルタ（第三十回生）
スターヘル圓成（第十八回生）
磯村啓子（第三・四回生）

（敬称略）



司会　本日は横浜善光寺留学僧育英会第三十回記念交歓会にお集まりいただき、ありがとうございます。第二部は座談会として、育英生の皆様にお話を頂きます。育英生は今年の第三十回生で百三十二名となりました。二十五ヶ国及び二地域の方々です。本日はタイの寺院やアメリカの禅センターなどで修行された方々、イギリス、ドイツ、インドなどに留学された方、また海外から日本の大学や寺院で参学された方々などを集めての座談会を行います。現在はそれぞれの方々は寺院や大学において教化・教育にご活躍なさっておられまして、このような素晴らしい方々をこの横浜善光寺留学僧育英会が輩出したのだということがおわかりいただけると思います。

この他にもまだまだたくさん人材がいらっしゃるのですが、本日は十四名の元育英生をお迎えいたしまして、それぞれの留学期間に得たものは何だったのか、または異文化に接して印象的なことは何か、等について語っていただきたいと思います。それでは安井様からお願いいたします。



安井　ありがとうございます。第二回の昭和六十一年と六十二年に育英生に採用され、奨学金を頂戴させていただいた安井です。私はインドのカルカッタ大学で原始仏教哲学を研究するために博士課程に昭和五十八年から行っていました。昭和六十年に第一期育英生の梅田尚平さんがタイのワットパクナムか

らの帰りにお釈迦さんの覚られたブッタガヤの大塔に黄色い衣を着て歩いていらしたんですわ。十二月八日でしたわ。私も大塔のお参りして草の上に座っていたら、歩き方で日本人はだいたいわかるので気になってちょっと話をしたら、「横浜の善光寺という寺で留学僧育英会ができてその一期生でパクナムに来た。日本に帰る前に是非お釈迦様のところにお参りに来たいと思うて来た」と、そう言わはるんですわ。それでその時、この育英会のことを詳しく聞いて、それやったら私も是非いっぺん応募しようかと、インドから善光寺の方丈さんに手紙を書いたんです。そしたら理事会に諮るから論文を送れということで、送りましたら、あなたを留学僧に決定しましたと。何年でもいいから、好きなことをやってきなさいとのことでした。嬉しかったですわ。インドに来た当初は二、三年のつもりでいたけど、四年目と五年目は善光寺さんの奨学金をいただいて研究させていただきました。

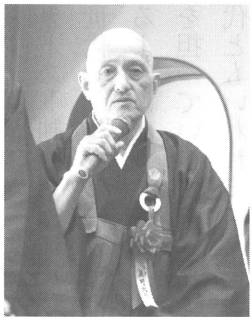
ところで私の本当の目的は原始仏教についての研究じゃなくて、お釈迦さんの聖地を村から村を全部歩いて行脚してお釈迦さんと対座して本当の仏教って何なのかを知りたかったんです。でも学問を超えた世界でそれを求めていくためには、どこかきちっとしたところに席をおかんとだめだということで、カルカッタ大学に縁があって、研究させていただきました。そして時間をみてお釈迦さんの聖地を網代笠かぶって錫杖もって村から村へずっと行脚させていただきました。それで論文も書かずに「先生、これで帰りますわ」というたら指導教授がまたえらい人でね。「安井君、あんたこれだけやったんだから、なんでもいいから論文書け。君やったら書けるはずやから」と。いや、英語もあんまりやしなーと思ったけど、指導教授は「わし

が何でも手伝うから是非なんでもいいから書いてくれ」と。それで、論文も書かせていただきました。

それでわかったのは、お釈迦様は思想家でも哲学者でもない。仏法はお釈迦さんの思想でもないし、哲学でもないし、学問でもないということです。お釈迦様はあくまで、仏道を求めて、生涯求道者として仏道をただひたすらに歩まれた方のような気がしました。だから今の日本の仏教界がどうも行き詰まっているのは、あまりにも学問に偏りすぎて、学問的になりすぎて、仏道を実際に実践して歩む人が本当に少なくなったからだと思います。そこに日本の仏教界の大きな現状の課題があると思います。だから仏教は道を歩む人が大切です。歩んだら道のないところに道ができます。だから今の日本の仏教界は、「学栄えて道滅ぶ」気がしてます。だから私はあくまで求道者で道を歩む人でありたい、そういう宗教者でありたいし、一生求道者でありたいです。ありがとうございます。

宇野　私も実は安井先生が「君はインドに行かなくちゃいけない」ということで、紹介していただいてインドに行くことが出来たんです。今、安井先生が大変情熱的にお話をして下さいましたが、私はこの世で何が大事かというと本当に「ご縁」だと思うんです。ご縁があって感謝の心があってそして寛容であることが大事です。そういう気持ちがあれば争いは起こりませんし、みんな許して、こういう奴だからしょうがないかということでもいいと思います。私もそういうことで生かされてるような気が今になってしています。感謝があれば

戦争も起こらない。テロとかそういうことを私は考えられません。感謝の気持ちさえあれば。仏教というのは唯一争いをしない宗教だと信じていますし、私もそれを実践していきたいと思います。



真野　私は一九九七年から二〇〇三年まで六年間になりますけど、タイとミャンマーの方へ上座部の勉強に行ってきました。その間、第十四回と第十五回の育英生として奨学金をいただきました。大変お世話になりました。上座部仏教の修行は、日本の仏教とは大きく違います。本来、仏教の修行は楽しいものです。学べば学ぶほど心は自由に解き放たれていきます。そして、その楽しさ、清々しさが修行者のさらなる高みを目指す原動力にもなっています。私は、このタイ・ミャンマーでの修学、修習の経験を経て、人格までも一変し、今でも心はタイやミャンマーに行ったなりになっております。ありがとうございました。

山本　私はタイのワットパクナムに行かせて頂きました。ワットパクナムの安居の時は真面目におりましたけど、その後はあちこち行かせてもらいました。スリランカやインドやネパールなどあちらこちらに行き、いろんなことを経験しました。冊子にも書きましたけれど、人は誰も生まれるところを選んで生まれないし、人種も選んで生まれないし、国も選んで生まれて来ませんね。環境だって選ん

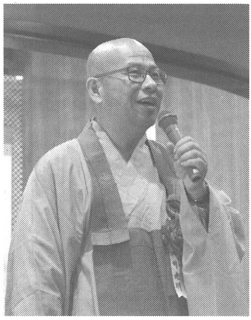
で生まれて来ませんからみんな同じなんですよ。だからどんな方とも仲良くなりまして、いろんな方にあちらこちら連れてっていただきました。スリランカに行きましたし、インドでは普通は行かないようなところにも連れて行ってもらいました。インドは一九四七年に独立し、その後本当にすごい勢いです。一世代二世代はカースト制のために貧しかったけれど、今は三世代ですね。この方たちはちゃんと学校に行けるようになりまして、IT産業でも大切な役割を担っていますよね。二十一世紀はインドの時代ともいわれます。このように人類というのは環境によって変わっていくものなんです。同じ地球に生まれ合わせてどこにも逃げられませんからね。

現在も人を差別したり戦争したりしてますが、そういうことじゃなくて本当にこの狭い地球で生きて行くためには同じ人間だという哲学から変えなければいけないと思っております。そういうことをいろんな経験から学びました。ありがとうございました。

伊藤　私もタイのワットパクナムに安居させてもらいました。私の時はちょうどタイの内乱が激化して渡航が半年延びました。

タイはご承知の通り仏教国。男性は成人になると一旦僧侶となる通過儀礼があり、私の同級生で一緒に寺に入ったのは五十名程。多くが三ヶ月で還俗します。一年後には三人になっていました。日本人の先輩僧侶もいたので、寄生虫のように付いて回り色々と体験させてもらいました。詳しくは冊子を見て下さい。貴重な機会

を与えて下さった善光寺育英会をはじめすべての皆様に感謝します。

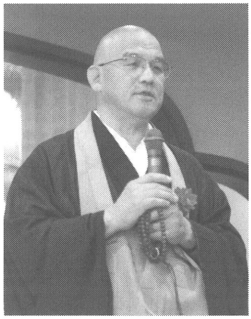


胡　僕は善光寺では大変お世話になりました。特に僕はドイツのハンブルク大学に一年行かせていただきました。日本に戻って善光寺で皆さんとお手伝いをやってきました。日本にいる時間は中国にいる時間よりずっと長くなりました。一番感じたのは育英生として見ていて、黒田武志老師、それと桐ヶ谷寺の方丈様、また黒田家のみなさん、つくづくやっぱり黒田一族は海外に力をいれているなぁと本当に感心しました。今年ロサンゼルスの前角老師が開創した禅道場にも行きまして改めてそのことを感じました。先ほど東老師も世界禅センターについておっしゃっていましたが、まさにZENというものが世界に通用する共通の言語だと考えています。

　僕は中国の天童寺から来て今年で二十八年になりますので、そろそろ故郷に帰る念も起こしていますが、僕を必要としているところがあれば頑張りたいと思います。昔、黒田老師が「四分の光陰が三分過ぎた」と云われました。そういう風に思うと僕は若い時は「生老病死」のことが何か解らなかったけれど、人間必ずそういう四段階を経過しなければいけないなと感じています。自分も五十二歳になって段々体力が落ちてきましたけれど、この善光寺に初めて来た頃は善光寺先代方丈さんもまだ六十歳前でしたから、すごく元気で、今も思いだすと非常に懐かしく思います。皆様も非常に元気そうで、ここに来ると、いろいろ楽しい思い出が蘇るんですね。僕にとってとても思い出深い場所なんで

す。

黒田老師のエネルギーをいただいて、世界のために禅の普及をなにかしようと思っているんですけど、なかなかまだ出来ていなくて黒田老師に対して恥ずかしい思いがあります。自分の抱負というよりも、いただいたご恩に報いることができていないことが非常に慚愧に思うところです。これからもう少し頑張っていきたいと思います。



島崎　臨済宗妙心寺派の島崎と申します。先ほど東老師が、「人の世話をしても後ろ足で砂をかけていく」とおっしゃられていたのを聞いて、先代武志老師が「おっさんには何も期待しとらん」といわれたのを思い出しました。私が善光寺の育英会とご縁を頂いたのは、臨済宗の紫野大徳寺の道場から花園大学に非常勤でこないかといわれ、行ったところ二年経ってもずっと非常勤で全然常勤にしてくれないなぁと思ってる時に、『中外日報』でこの留学僧の募集が出ていたのがきっかけです。その募集を見まして、こんなんでいいのかなぁと思いながらも論文を書きました。まぁ経緯は色々ありましたけど無事に採用していただきました。

私の修士論文はアメリカの市民宗教というものをテーマにしました。今はトランプ騒動と言ってごちゃごちゃとしてますけど、アメリカの宗教とはどんなものか、もともと人工的な国ですから、国民全体が心を寄せるために何か必要だろうということで、その一つコアになっている市民宗教を研究しました。当時ちょっとは熱も冷めていたんでしょうけれど、カウンター・

カルチャーというものがありました。いわゆるWASP（ワスプ）、ホワイト・アグロサクソン・プロテスタント、そういう既成の人たちにアンチする動きがあり、その対抗反応の一つがいわゆるZENでした。

当時花園大学の学長である山田無文老師がお弟子さんのいるアメリカやメキシコなど方々のセンターを視察されて帰ってこられた後の談話で「あっちの禅がホンモノじゃ、悩みのない日本人の修行」こういうことをおっしゃった。これでは、いかんと思い、まあ少なくとも仏飯を頂戴して育ててもらって、ただ衣着て、あたま丸めただけじゃ申し訳ないという思いが私なりに致しました。幸いに育英生として採用していただき先代方丈さま、またとりわけアメリカに滞在中は前角老師が差配をしてくださいまして、「いい勉強をしていきなさい」と。随分臨済宗にも親和感をもっておられ、ご指導頂きました。今この二人の老師を思い出すだけでも、ちょっと目頭がウルウルとしますけれども、本当にお世話になりました。今後ともこの育英会が発展されて、なんらかの形でわたしらも社会貢献を微力ながらできればと思っています。

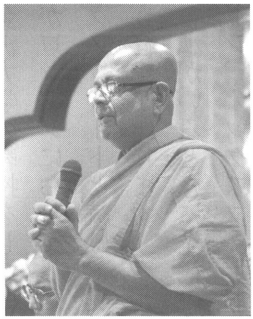
岩波　曹洞宗の岩波弘道と申します。今お話された島崎師と一緒に、前角博雄老師が禅センターに戻られるのにくっついて行く形で渡米したのが最初の海外でした。しばらく島崎師と一緒に行動したのですが、途中から別スケジュールになり、私の場合は都合一年半。昭和六十二年（一九八七）四月に渡米して翌一九八八年十二月に帰国しました。その間、LA禅センターやニューヨークのジョン大道ロ

ーリー老師の禅マウンテン・モナストリーなどに滞在しました。今振り返っても育英会のこのような立派な先生方の中で、なぜ私が採用されたのかと不思議に思っております。少しの恩返しも出来ていませんが、草創期の頃だったからでしょうか、黒田老師からすれば、私のような者でも育英生としていけるんだという一つの自信を深めてもらえるステップにはなったのかなと勝手に思っております。みなさんご承知でしょうが、この育英会を始める時の逸話として黒田武志老師がお檀家の皆様に、「どうか皆様毎日一口ずつご飯を我慢してください。それを私共にお預け下さい。そして新しい留学僧のシステムをつくるんです」と、そのようにおっしゃっていました。その結果がこの私かと思うと申し訳ない気持ちはありますけれども何らかの形でお返しできればと考えています。

留学で得たものとして印象に残っている出来事はＬＡ禅センターにいるときに、メンバーではないんですけども、ヨーロッパ出身の女性がしばらく滞在していました。みなさん禅宗寺ってご存知ですかね。禅センターとは別に曹洞宗のオフィシャルに作られているいわゆる前線基地なのですが、その日禅宗寺でお葬式があるという話を聞きつけて、その女性が「私も見たい」といって、純粋に宗教的な興味で見学させてくれないかということで、ＯＫをもらったんですね。それを聞いて私も余計な事とは思ったのですけれど、私にとって葬儀とは、極めてプライベートのものだと思うもので、「葬儀は親族や関係者が参列するもので、それを物見遊山とまでは言わないまでも、興味本位で全く縁のない人が出るのはいかがなものか、そういうものは遠慮するものだよ」と言ったら、私のつたない英語が伝わらなかったのか、「なぜだ、私は先生に許可をもらった。あの人はＯＫといった、

なんで行ってはいけないんだ！」と怒られて、結果的にどうなったかはちょっと覚えてないんですけど、私もうまく説明しきれなかった事を思い出しました。つまりは良い悪いというよりも、いろんな考え方があるんだと教わりました。許可とってＯＫもらったんだからいいのだ、という考えもありますし、最近話題になっている忖度じゃないですけど、ここは身を引くべきだという考え方もある。いずれにしましても自分が絶対だと思っていたことが、まさに郷に入っては郷に従えで、絶対ではないのだということを体験させてもらいました。

今の話はその一端でありますが、そういう目には見えないものをいろいろ吸収させていただいたということが私の得たものと、そのように考えた次第です。



ヴィマラワンサ　スリランカから参りましたヴィマラワンサです。私は愛知学院大学で勉学していて、当時本当に生活するのが大変でした。前田惠學先生に、タイ、ミャンマー、スリランカ、その三つの国にいってフィールドワークとして瞑想のことを研究して帰って欲しいと言われ、引田先生の紹介で育英生になることができました。そのおかげで博士課程に入ることができました。黒田先生よりいただいた奨学金のおかげで私はよく勉強することができました。本当に感謝しております。

私がスリランカに帰るとき、日本で印象に残ったことはいっぱいありました。それは日本人は時間をちゃんと守っていること、ちゃんと仕事をやっていること、そういうことが私の印象

に残っていたわけです。その他にももっといろんなことがあったのですが、その事をスリランカに帰ってから、私の民族の為にどうやって教えたらいいかということを考えたのです。けれど一般の大人に言ってもうまくいかなかった。それで私のお寺で幼稚園を始めました。大人になってから何か教えても難しいから小さい時からと思って、幼稚園の子供に日本のやり方、挨拶とか時間を守ることとか簡単なことから教え始めました。私はいま二つ幼稚園をやっています。一つはお寺でやっているけれども、もう一つは田舎の方で二百五十人位の大きな幼稚園をやっています。それは全部日本の皆様に支えてもらったおかげでできたもの、応援してもらってつくったものだから感謝しております。

私がスリランカで社会奉仕するときは、いつも黒田先生に支援してもらいました。黒田先生がスリランカにおいでになってお目にかかることが出来て大変嬉しかったです。日本で学んだことをできるだけスリランカで教えていきたいと思います。今度みなさんも是非スリランカにいらしてください。

引田　第五回、平成元年にイギリスのオックスフォード大学の方に一年間育英生として奨学金をいただいて勉強させていただきました。ちょうどその前の第四回に今、金沢大学の教授をしている森先生がおられて彼がロンドンにおりましたので、ロンドンとオックスフォードと続けて奨学金をいただいたという経緯があります。

私がいるときに先代の武志老師と奥様がロンドン、オックスフォードと来ていただいて激励

をいただきました。本当にありがとうございました。そのあと、非常に可愛がっていただきました。愛知学院には留学生も何人か来ておったのですが、スリランカとか、バングラディッシュとか、ベトナムとか、インドネシアとか、いろんなところからきていました。こうした世界各地からきている留学生に奨学金をいただきましてありがとうございました。今それぞれが故郷に帰って活躍しておりますので非常によかったなと思っています。

やっぱりアジアのそういう人たちを見ていると、日本の仏教はもう少し広がりをもたなければいけないんじゃないかと思っています。檀家制度で今のような形でやっていくのがいいのか、それだとなかなか難しい時代になってきています。

昨年、用があって台湾の佛光山に行ってまいりました。そこで佛光山の話だとか、それから義災基金の先生たちと話していたら、やっぱり向こうは色んなことをやって、それをテレビでずっと放映しているんですね。こんなことをやっているんだということを常にアピールすることが台湾流ですかね。尼僧さんも非常に多く、その点も学ばなければいかんかなという気も最近いたしております。ありがとうございました。

ウィリアム・ダンカン　南カリフォルニア大学のウィリアム・ダンカンです。育英生としてご縁ができたのは十八年位前でしょうか。その時はハーバード大学のドクターコースで卒論を書くために駒澤大学の学長廣瀬良弘先生のところで勉強させてもらっていました。学問より育英生として学んだことは、や

はり黒田老師のエネルギー。そして、確信。それが一番残ったものです。採用された一年だけではなく、その後もよく老師から「ダンカン、明日までにこれを訳せ！」と言ってＦＡＸが届くんですね。「今度スリランカに行くからこのダルマパーラの話を英語に訳して明日までに」とか、こういうような注文がよくあったんですけれど、関係というのがその一年だけではなくその後も続いたんです。

老師は自信を持って、確信をもっていました。いつも老師は「ダン！カン！」と大きな声で仰って、なにかこう世界に出ていくような、大きい爆発みたいなものを常に感じさせて頂きました。人生なにかやるんだったら大きくやるというような、自分の道を発見して歩んでそして大きく出るというような、なにかすごい教えを彼のエネルギーとしてもらったなぁということです。その後大学教授になったり、研究所を立ち上げたりしましたが、今回三十回を迎えるにあたって、やはり立ち上げ、スタートアップというのは難しいもので、これも老師だからこそできたこと。そう思って、じゃあ自分でしかできないものは何なのか、というものをいつも公案として問うことができたというのが育英生としての誇りだと思います。ありがとうございます。

サンヴィド・マルタ

イタリア、ヴェネチア大学博士課程のサンヴィド・マルタと申します。去年の九月から早稲田大学の大久保良俊先生のもとで研究しております。また今年の四月から駒澤大学禅センターの研究員として通っております。今はまだ留学中なんですけれど、今年第三十回の善光寺留学僧育英

会の育英生として採用して頂きました。そのお陰で早稲田大学に身を置いて順調に研究を進めております。この育英会のお陰で善光寺の皆様と交流できて人間として成長できたのではないかと思います。本当に感謝申し上げます。これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。

スターヘル圓成　ブラジル大観寺のスターヘル圓成ともうします。私は十五年前育英生に採用頂きました。その育英金でブラジルに禅センターみたいなものをサンパウロから二時間離れたところでつくりました。その時から坐禅会とか摂心とか禅の話とかみんなに教えることができるようになりました。だんだん人も増えていって、みんな仏教とか禅に興味を持つようになりました。以前は仏教のことはなにも知られていませんでした。しかし今ではセンターも狭くなって去年から新しい寺を作る計画をしています。典座寮とか禅堂とか新しく作ります。みんなで土壁を塗って一緒に作っています。

今、ブラジルの社会もすごい大変です。みんないろいろ混乱していますが、私もこれからもっと頑張りたいと思います。善光寺の皆様のお陰でブラジルで十五年前に始めることが出来ました。そして桐ヶ谷寺の方丈様のおかげで続けることもできました。本当に皆様に感謝しています。どうもありがとうございます。

磯村　善光寺留学僧育英会三十回おめでとうございます。私はインドの空港で先代方丈様にお会いしたことが育英会との出逢いでした。カルカッタ空港に友人と迎えに行ったのですが、飛

行機は到着しているのになかなか出て来られない。やっと出てきた方丈様を見てびっくり。お腹がお相撲さんのようにひどく膨らんでいるんです。開口一番「イヤー、金持ちになっちゃったよ！」とおどけておられ、胴巻きにインドの紙幣が分厚くグルグル巻きになっていました。貨幣価値の違いから両替の際に一気にお金持ちになられたというわけです。子供のように無邪気に機嫌よく笑っておられたお姿を懐かしく思い起こします。その後に第三回の育英生として採用して頂き研究を続けることが出来ました。帰国後も事ある毎に善光寺に伺いました。方丈様のお話を伺う度にその大胆な行動力に驚かされました。その折は、いつも倫子奥様がお側におられて献身的にサポートをされていることが印象的でした。今日は久し振りに善光寺にお伺いして懐かしい皆様がたにお会いでき、予定を調整して駆けつけることが出来て本当に良かったです。先代様の志の高さと清々しさ、その強靭な魂を方丈様の教えとして私も受け継いでまいりたいと思っております。育英会の今後益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

司会　折角の機会ですから会場のみなさまよりご質問ご意見を受けつけます。なお、この後、懇親会もありますのでその際にお話されてもかまいませんが……。

それでは私の方から一言申し述べさせていただきます。

先ほど東老師が、黒田老師の育英会発願の影響を受けて世界禅センターを構想されたとのお話をうかがいました。考えてみればこうしてこ

の善光寺において、インド、スリランカ、タイ、中国、今日は来ていないですけれどモンゴルの方や韓国の方もいらっしゃった。さらには欧米の一流の学者の先生達、また日本からも欧米に行かれています。考えてみたらここで世界仏教センターができるんですね。

かつて、私とヴィマラワンサさんと胡さんとモンゴルの嘉木楊さん、韓国の李焌秀さんとが善光寺育英会の辞令交付式で一緒になった時のことですが、こんな一幕がありました。

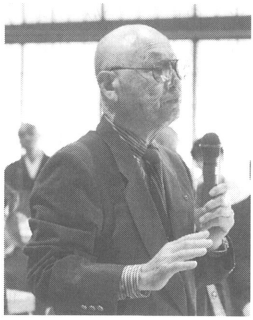
その時、私は皆さんに瞑想のときの印の結び方を一斉にやっていただいたのです。我々日本の禅僧は坐禅をするときに法界定印など瞑想の印を結びます。その場合、右手の手のひらが下、左の手のひらを上にします。これは中国や韓国も同じでした。しかしスリランカやモンゴルの僧の方々は左の手のひらを下にされたのです。その場でアジアの仏教文化の違いが一瞬のうちにわかったのです。

また西欧の禅センターから来日された方、あるいは西欧の禅センターに参学した日本人僧も善光寺留学僧にはたくさんおられて、世界中の禅センターの様子や情報がこの善光寺ではわかるのです。日本にあまたのお寺がありますが、なかなかこういう機会をもてるお寺はありません。こんなことが出来るのはこの善光寺だからでしょう。それだけ世界中からここに多くの人材が集まり交流もなされてきたのです。一三〇人の力を結集すれば世界仏教センターも夢ではありません。そういう力を善光寺は持っているんですよね。世界的視野をもって育英会を創り上げた黒田武志老師の先見の明を改めて感じる次第です。

私も初めて黒田老師にお会いした時の強烈な印象は忘れられません。そもそも別の用件で善光寺に来たのですが、善光寺を出るときにはア

メリカに行く事になっていました。「お前さんはアメリカに行きなさい」その一言です。日本でも一回も飛行機に乗ったことがない人が初めての飛行機でロサンゼルスに飛んだのですが、飛行機に乗っても、なぜ強く渡米を勧められたのかわかりませんでした。でも行ってよかったですよ。ロサンゼルスに行ったら「ああそうだったのか」と思いました。無理にでも人を動かす老師のエネルギーですね。私は黒田老師がいなかったらアメリカへ行っていないですからね。でもそれで変わったんです。大変大きな御恩を受けたつもりであります。そのことを一言加えさせて頂きます。それでは会場よりなにかございますか。

東郷総代　育英生の皆様ありがとうございました。私の方から三十四年前の育英会が発足する頃の話をさせていただきます。そのとき先代大



圓武志和尚から、世界に留学僧を送るための会をつくりたいというお話をいただきましたが、ついてはお金がない、檀家の方もお金がない。それなのにやりたい。しかし一人の力ではどうにもならない。そういうことでした。

しかし、それでも先代武志和尚はおっしゃいました。

「多くの力を結集しなければ一人の留学僧、一人の世界の将来を担う立派な人材はできない。私の理念は世の中の役に立つ人、そして役に立つ人を育てるという人を育てたい。そのためにお金がいる」と。

この強い先代の意志を受けまして、これまでそのお金を私たち檀信徒は三十何年間出し続け

てきたわけです。

ちょうど先代が亡くなって、もう休めばいいなと、こう思っていたら、今度は新住職が「私は父を継承してこれからも留学僧を進めます」ということになりました。そして今日を迎えることができました。

これまで延べ百三十二名もの方を送り出して、今日ここでお集まりになったのが十四名です。一割の留学僧の方がお見えになりました。今皆さんのお姿を拝見して、ああ、よかった、こういう方々が世界で活躍され、またご自身も救われて、それぞれの道でいそしむことができているということがうかがえて、本当にうれしくほっといたしました。ああ、あのお金は無駄じゃなかったんだな、こういう風に使われて、皆さんがこういう風に羽ばたいていらっしゃるのを感じて本当にうれしかったんです。

私はあるとき先代に申し上げたんです。「理事長、育英会はやめたらどうですか。だれも助かっていないし、留学僧の方も善光寺にみえないじゃないですか」と。

すると先代は言いました。

「ちょっと待て。これはな、他を救うにあらずしておのれ救われる」と、こう言われたんです。「留学僧となった方を救うのではなくて、これをやっている自分が救われるんだ」と。このお寺が救われるんだと。「同じようなことをやるお寺では意味がないんだ。特に他と違うとしたら何だといったらこの育英制度なんだ」と言われました。

こうして今日まで継承されて、おかげさまで、こんな小さなお寺で、三十年も続けて留学僧を送れたというのは、あるいは皆さん留学僧のご活躍のお陰なのかもしれません。

改めてこの育英会については今後も住職を応援し、留学資金をかき集めて、一人でも多く送

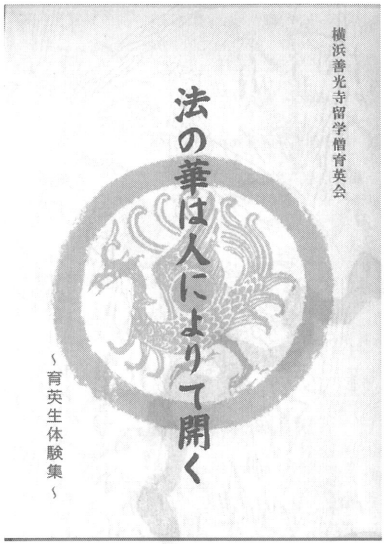
れるようにしたいな、そんなことを檀信徒として、今うかがって失礼ではございましたが、このように御礼申し上げさせていただきます。

☆留学僧体験談を刊行☆

横浜善光寺留学僧育英会育英生体験集

『法の華は人によりて開く』

この度、横浜善光寺留学僧育英会第三十回記念事業として、歴代の育英生各々が留学体験を執筆されたものをまとめました。皆様ご活躍され、時間の限られている中、二十五名の方々が体験談を綴って下さいました。



檀信徒の皆様方には既に記念交歓会後、お手元にお送り致しておりますが、この体験集は仏教の専門的な論文ではなく、各人が留学中の貴重な体験や先代理事長黒田武志老師に対する思いをしたためており、この育英会の意義を見ることができます。

☆育英生からのおたより☆

冠省　過日は留学僧育英会の交歓会にお招き頂き誠に有難く存じます。おかげさまで貴重なひと時を過ごすことが出来ました。改めて深謝申し上げます。

それに致しましても三十年余りに亘って百三十人もの人間に無償の奨学金を出し続けることなどやはり尋常の覚悟で成し得ることではありません。しかも、不肖などは未だに善光寺様にお世話をかけている始末で、申し訳なく存じている次第です。ただ、「育英会」を支え続

けて下さっている無数の方々の思いは無駄にしてはいけない。自分なりに現在置かれている環境で微力を尽くそうという気持ちは常にもっております。報恩底をどのように不肖なりに体現していけるか、これが今後の課題と心得ています。

また、早速次年度の「募集要項」をお送り下さり有り難うございます。どうぞご自愛のほど。

六月吉日　　島崎　義孝　九拝

残暑問候　先日ドイツよりトビアス氏が山寺まで来寺され、八月末までに京都で再会する予定です。書籍、有難く受領いたしました。トビアス氏にも渡したく、もう一部献本下さるようお願い申し上げます。まずは受領御礼とお願いまで。

八月十七日　　田中智誠　拝上

黒田博志老師

先日は大変お忙しい中、お時間を取ってくださり、誠にありがとうございます。久しぶりにお会いできて大変嬉しかったです。

善光寺の住所を間違えてしまったため、約束の時間に遅れ、本当に申し訳ございませんでした。扇子をお送り致します。とてもつまらないものになりますが、これからはあつい季節になりますので、どうかお使いいただければ幸いでございます。

どうぞくれぐれもご自愛くださいますようにお祈り申し上げております。

五月二十八日の行事、無事に成功するよう、祈ってます。また、お会いできる日を楽しみにしてます。

九拝

アイーダ・ママードウァ

☆善光寺留学僧育英会
第三十回記念交歓会によせて☆

【電報】

本日は、横浜善光寺留学僧育英会第三十回をお迎えられ、並びに記念出版をされましたことを重ねてお慶びお祝いを申し上げます。
黒田武志老師様の「元気にやっているか」と、いつも励まして下さいましたお声が聞こえて参ります。当会、並びに善光寺様の益々の御隆盛を祈念申し上げます。　合掌

第六回海外留学僧
福井県　玉泉寺　沖田玉映　拝

善光寺留学僧育英会創立　三十周年を祝し、ますますの寺門繁栄を祈るとともに、育英会のますますのご発展と、参会の各聖の法体健全をお祈り申し上げます。

東京　牛込　真清浄寺　日光

【お手紙】

拝復　『法の華は人によりて開く』を拝受、早速に読ませて頂きました。武志老師の創られた育英会も三十回、百三十名の留学僧を出されたとのこと、すばらしい仕事が順調にすすんでいること心より喜んでおります。各留学生の思い出話はそれぞれに面白く、ご本人達にとってもこうした文をまとめることは嬉しいことだったでしょう。私たち一般読者にとっても武志老師の御顔やお話しぶりをなつかしく思い出しています。

八月十八日　　奈良康明

『法の華は人によりて開く』を拝受いたしました。育英会の活発な活動の諸相がよく記されており、いつもながらですが感銘を深くいたしました。先代武志老師の懸命に話されるお写真、とても懐かしく思います。武志老師の「人づくり」の悲願が確実に実現されていることを大変よろこばしく存じます。

博志老師には是非お師匠様を超えるような仏教者になられますよう強くねがっております。熊谷総代様も矍鑠としておられ何よりのことと存じます。まずは御礼までに

八月十二日　　合掌　　佐々木宏幹

残暑御見舞い申し上げます

貴寺留学僧育英会第三十回おめでとうございます。また、記念誌『法の華は人によりて開く』ご恵贈賜りまして心から感謝いたしております。世界平和は心と心の絆により実現することです。一層の発展を祈念いたし御礼といたします。

合掌

宮本延雄　九拝

残暑厳しき折、お変わりなくお過ごしのことと拝察いたします。育英生の体験集拝受いたしました。三十年の間に多くの育英生が育った姿に感慨を覚えます。善光寺様との御縁が育英生一人一人の人生を方向づけ、新たな彩りを加えていたことを考えますと、人と人との出会い、縁のもつ力の大きさを思わずにはいられません。益々の御活躍を念じ上げます。　不一

中外日報社　形山俊彦

前略　過日育英生体験集を送って頂き博志様の心情に大変嬉しく拝読させて頂きました。

今でも私の印象に残っている方は秋田県の方で国安大智さんです。私の想像ではニューヨーク禅センターへの一回生ではと思います。一度米国へのビザを拒否されたことで方丈様からなんとかしてほしいと依頼されて、当時たいへん仲良くしていた領事を再度説得して発給して頂いた事を今でも思い出されます。

その後大智さんのお父上様から丁重なるお礼のお手紙を頂いた事も思い出されます。大智さん、お父様の智哲様、ご壮健でご活躍されていることと察しております。又、三、四名の方のビザの取得にもお手伝いをした記憶があります。その中のお一人、今回手記を拝見致しました静岡県にお住まいの河内様も記憶にあります。今考えるとたいへん微力ながらお役に立てた事、嬉しく思っております。

それにしてもお父上の方丈様は偉大な方だと感銘しております。

末筆ながら益々のご発展心よりお祈り致します。乱筆乱文ご寛容の程を。

鈴木良一

謹啓　育英生体験集『法の華は人によりて開く』を賜りまして大変有り難うございました。先代理事長および皆々様からの御恩を忘れず精進して参りたいと存じます。今後も何卒よろしくお願い申し上げます。

早川祥賢　九拝

前略　ごめん下さいませ。『法の華は人によりて開く』を送って下さいましてほんとうにありがとうございます。黒田武志前理事長様の情

熱が結晶となり実を結び、あとを継がれた博志様も立派です。『法燈は海を越えて』とともに、大切に読ませていただきます。横浜善光寺留学僧育英会の益々の発展をお祈り申し上げます。

かしこ

八月吉日　　浅香　恵

前略　『法の華は人によりて開く』ありがとうございました。秋彼岸法会は、どうしても予定がとれず参加出来ないこと残念です。水庭師の法話も楽しみにしておりますが、又の時に……

ご詠歌の会への参加何とか出来たらと思っています。

高橋百合子

☆育英生からの寄贈本☆

・IPPEN: The Japanese Buddhist "Sage Who Abandoned All"　早田（磯村）啓子

・『原発　瞬楽永苦』　島崎義孝　ノンブル社

・『身心が美しくなる禅の作法　一日一禅』（樋口）星覚　主婦の友社

・『日蓮大聖人　法華経の真実　吉田日光共著　白陽社